平成２６年度　第４号

保育の質の向上研修ニュース

発行日　平成26年12月20日
発行者　舞鶴市（子ども未来室）

９月３０日　東山保育園において公開保育を実施！

東山保育園での公開保育は、昨年から２回目となり、引き続き神戸大学大学院准教授北野幸子先生にご指導いただきました。数日前に運動会を終えたばかりとのことで、昨年までとは違う運動会での子どもや保護者の様子を聞くこともできました。

また、各クラスには、ドキュメンテーションが所狭しと掲示してあり、昨年から引き続き、保護者に対して「保育を可視化し、学びや育ちを伝える」ことを常に実践しておられることに大変うれしく感じました。北野先生も、日々進化しているドキュメンテーションや、プロジェクト型保育を意識した行事、保育を実践しようとされていることを大変喜んでくださいました。

北野先生には、「保育には正解や完璧はない！課題を探し、少しでも進んでいくこと。」との言葉もいただき、舞鶴市内の各園が学び、舞鶴全体の保育の質があがっていくことを期待できる研修となりました。

参加保育園14園

永福保育園
岡田保育園
さくら保育園
タンポポハウス
平保育園
東山保育園
ルンビニ保育園
八雲保育園
やまもも保育園
中保育所
東保育所
東・南・西乳児保育所

遊びと遊びのつながりを考えた環境と子ども同士の共同性、相互作用を促す言葉がけを！

＜2歳児　スタンプ遊び＞

◎保育士１人対子ども７、８人くらいの集団で、ほとんど見立てて集中して遊んでいた。
◎スタンプの持ち手が2歳児の手にちょうどいいサイズだった。
◎子どもの目が保育士や隣に向いている→伝えたい気持ちが育っている。
◎「混ぜた、出来た、見て」＝２歳の言葉として良い。
◎「何と何がまざったの？ここ、こうなんだね」等担任の先生の話し方が良かった。誘い語、疑問語が多かった。
◎耳からシャワーのように言葉を聞いても、実体験を伴わない言葉は入らず、定着しない。

※パラレルトーク＝子どもの行動、活動、体験、感情を保育士が話すことが大事。それから、子どもが「混ぜた」と言ったら、「何と何を混ぜたからこんな風になったんだね」と子どもの投げかけ言葉をフルセンテスにして話すようにする。

＜４，５歳児　製作遊び＞

◎作って出来上がったものを飾る場所があったのが良かった。
◎飾るコーナーの前で10～15人くらいの子ども達と、何に興味があってどういう工夫をしたのかを話す機会を作る。保育士は、「似てるね、〇〇ちゃんもそうだったね」等、子ども同士の共同性、相互作用を促す言葉がけをすると良い。
◎製作コーナーはちょっと広くて大きかった。→どうすれば、子ども同士がつながっていくのか？環境構成（机の位置、数など）考えることが大事。友達と相談し合う、伝えあう姿が増えるように。
◎コーナーで遊ぶ子どもの人数は10～15人のまとまりだと子どもの左右が近くなり相互作用も生まれる。子ども同士の発言が増えてくる。
◎作品を自由な発想で作れるような工夫をするとよい。（素材は何がいいのか？どこまで準備するのか？等）。
◎その発想を周りに発信することで、子ども同士のかかわりが増える。

※共同的学びを促すためにも、話し合い、振り返りができる機会を作ることが大事。

＜３歳児　砂場遊び＞

◎器や素材を楽しんだり、行程、イメージ、作り方を楽しんだり、色んな要素がある遊びだった。
◎水より砂、砂より泥である。→多面性がある。
◎机の高さが２通りあり（高い、低い）それぞれで遊びが違っていて良かった。
◎低い＝バケツでお料理を楽しむ姿。→子どもが作業しやすい。
◎高い＝料理で来たものが平べったいお皿で並んでいた。→子どもが見比べるのに適していた。
◎環境として、遊びと遊びのつながりを考える…ベンチ、机２つ、水の位置と子ども達の相互作用を考える。子どもは互いの遊びをちらちら気にして見ている姿が見られたので、互いに関われるような環境を整え、保育士が意図的に子ども同士をつなげることが大事。
◎子どもがイメージしたり、発言に肯定語が多かった。
◎ごっこ遊びは想像力が育つ。
◎子どもの「カレーパーティー開いているの」の言葉から、給食でもカレーパーテイーするとより遊びが展開するのではないか。

※モデルとなる年長や年中児との距離感を考えて、いっしょに遊ぶ。
４、５歳児の染め物遊び、製作遊び（お店の商品づくり）等との遊びのつながりも考えていくと砂遊びのお店屋さん等もっと発展していく。

＜４、５歳児　染め物遊び＞

◎藍を種から育てていて、子どもの中につながりとか連続性とかがあって良かった。
◎興味ある子が少しずつやっていたのは、子どもにやった感がある。何回も何回も楽しんでいる子がいた。

※できたものが商品になったり、３歳の砂遊びがごっこ遊びになり、そこのテーブルクロスになる可能性もある。遊びのつながりが大事。

～北野先生カンファレンスより～
何を学び、何が育ったか？その根拠となる子どもの姿、言葉は何か？を考える

＜行事のあり方＞
◎日本の行事保育は主体的なのか？自己実現にあたるのか？やらされているのではないか？という議論が北欧ではある。
◎見られる嬉しさ、一緒に頑張る楽しさはある。ただ一方で日頃の保育からあまりに分断されてしまうと遊びが切れてしまい、やらされている感が出てしまう。
◎その活動のあり方が問題で、日常性、自明性、主体性がどれだけ埋め込まれているのかが大切。
◎東山保育所の運動会では、幼児のダンスをやりたくて乳児が自分から出てきて踊ったとのこと。→叱られる、与えられた行動しかしていない設定保育型カリキュラムの子どもの傾向としては、やりたくても出てこれない。
◎「見たい」「やりたい」「入ってみたい」という気持ちの育ちには、子どもの自明性がある。その主体性が、行事の中にはしっかり埋め込まれていることが大事。この視点を行事には持って欲しい。

＜ドキュメンテーション＞
◎子どもが何を言った、何をした、それについて私が何を思ったという視点（表面的記録）から、何に興味・関心を持ち、発見しているのか、この活動の背景にある子どもの目線の先には何があるのかという視点（深層的記録）に変わっていった。
◎生活、遊びの中で興味、関心を持ったものについて、知識として身につけたこと、技術として身につけたことが山のようにあるが、それはなかなか保護者に伝わらない。
◎発見、探求、調べるっていうところがキーワードとして入っているといい。
◎学びや育ちが見られましたという**根拠となるような写真や、子どもの姿、言葉を拾って欲しい**。
◎「楽しんでいた」「できた」と先生が判断したときの子どもの言葉と様子を入れる。
◎できるようになったであろう理由と環境設営、先生の言葉のかけ方、そして教育の意図や意図性が入ると更によい。

9月29日：ドキュメンテーションを読み取る（グループワーク）

研修では、ドキュメンテーションの事例をグループで読み取るという趣旨のグループワークを実施しました。事例の保育の中で保育士の「育てたい力」「ねらい」は何か？どんな発達や育ちがあったのか？その根拠となる子どもの姿や言葉は何か？保育士の関わり、言葉かけは？私ならこうする…についてグループごとに議論しました。
　同じドキュメンテーションを見ていても様々なとらえ方・受け止め方があり、答えがひとつではないことや話し合うことで保育の引き出しが増えることをこのワークの中で感じられたのではないでしょうか？北野先生からも、**議論を重ねることが実践力を高めること、同僚と思いを伝え合える関係性が重要であること**も教えていただきました。

岡田保育園　タンポポハウス　東保育所より園で取り組んでいるドキュメンテーションの報告をしました。

◎子どもの好奇心・興味 関心・子どもの現実を起点とする。それをトピックスとし、可能であれば社会に飛び出し、様々なものとふれ、相互作用から新しい知恵を学び、さらに没頭し、探究を深めていく。
◎大切なのは、何をしてその中で何に気づいたか、何を学んだかである。
◎興味関心・好奇心の先は？…好きな遊び、友達との関わり等、子どもの日頃の姿から活動の起点が見えてくる。
◎子どもがしたいことをする、行きたいところへ行く、子ども主体に活動を作っていく。（シナリオ通りにさせるのは小学校以降）
◎予測しないことがどれだけ出てくるかと、期待しながら進めていくことが大切。
◎気づき、興味「なんでやろ？」「やってみたい！」という思いから、調べたり、比べたりしたことを可視化する。
◎どんな気づきがあったか、疑問に思ったことは何か、子どもが遊びをどう工夫したかが大事。
◎**“楽しんでいた”と伝える時、そう判断した子どもの姿・言葉がなくてはならない。**
◎ドキュメンテーションには、発達の視点、保育内容、５領域の視点、育ち、学びの見通しをふまえて書く。
◎子ども主体の保育には、全く保育士の意図性が入ってはいけないのではない。過剰な意図は良くないが、保育士が育てたい力や育てたい子ども像は意図を持ってほしい。
◎指示命令はしない。恣意的（主観的で自分勝手、行動や考え方に戦略がないこと）でない。

プロセスが大事だが、書いている内に「できた」「できなかった」という結果を書いてしまいがち…
～各園によるドキュメンテーション報告、北野先生の指導・助言より～

◎プロセスなのか結果なのか、結果でなくプロセスでとよく言われるが、結果は必ずある意味ではついてくる。こんな知識がついて、こんな技術がついた、こんな感情が育った、そしてこの力が応用力、活用力につながっていく。それを全く無視する必要はないが、つい保護者は「できた」という言葉があれば、そこに目がいくということに配慮が必要である。
◎私達は、子どもの発達を到達度評価をするが、それを開示する必要はない。小学校以降は必ず成績表を配るが、**なぜ、保育現場で成績表を配らないのかというと、個人差が大きく、どうやってきたかのプロセスが大事だから**である。また、「できなかったこと」にばかり目を向けない。
◎クラスの中で何人の子が何ができないかを先生が把握しておくことは大事だが、先生が理解して把握している到達度評価を子どもに相対的評価として伝える必要はない。保護者にも到達してることは個人ベースで伝えても、してないを相対的評価で伝える必要はない。
◎多くの保護者は小学校以降の教育に慣れているので仮にドキュメンテーションの中で「できた」という言葉を入れるとそこに目がいく。結果を知りたがる。だから、こんなふうにしたらこんな気付きがあったとか、こんなふうにして調べるのを楽しんでいたと知識と技術とコンテンツについてを書くけれど、そこの相対的評価にあたる言葉は書きすぎないほうがいい。
◎何に興味を持っていて、こんなふうな経験体験があってこういう試行錯誤しながら、こんなうれしそうな表情だったとか、わかったかわからなかったかよりもわかったことによって自分の自信がついたとか、あるいは達成感があるとか、またやりたいと次への意欲につながったというように書くとよい。
◎ドキュメンテーションは、ドキュメントではないので、どういう時系列的な育ちのプロセス、興味関心があり、どういう体験があってどんな力がつき、それがその後どんなふうに発展していくことが期待されるという、教育、育ちの流れの中にあるからドキュメンテーションなのである。
◎興味関心を起点とし、結果として個人差はあるが、すごく多層な知識と技術が身についていることも伝えたい。しかし、それをつけるために何か目的志向型の活動をしているわけではなく、あくまで興味関心がスタートだという保育が、重要なんだとわかるような書き方をする。